

中国

上海から引き揚げて

岩手県 小岩 テル子

一 勇躍、新生活の南京へ

私は、昭和十七（一九四二）年十一月に当時、陸軍の中支那派遣軍の憲兵隊司令部に、下士官として勤務していました主人をお世話して下さる方があって、郷里の岩手で結婚式を挙げました。結婚してすぐに、主人と共に任地の南京に行くことを望んでいたのですが、いろいろな事情から許可がおりるのに日数がかかることとなり、しばらくの間主人は南京で、私は岩手の実家でと別れ別れの生活をしていました。やがて現

地の受け入れ準備もできたので、渡航の許可が出て、昭和十八年六月に、待望の南京に向かって出発することになりました。そのころの国策の合い言葉の一つになっていた「産めよ、増やせよ！」を実現させるためではなかったかとも思いましたが、いずれにせよ現地への家族帯同が現実のこととなったのです。

私と同じような事情の軍人の新妻九人が、一緒に南京に行くことになりました。夢と希望に、胸をふくらませた新妻は、それぞれの思いを胸に抱いて、出帆港である長崎市内に集合しました。しかし期待に反して、乗船する予定の船が故障のため修理をすることに、出航はひと月後ということになりました。そのころの輸送用の船舶事情からすれば、軍の需要が最優先で、代わりの船がすぐに準備されるということは考

えられないことでした。したがって、このひと月間の出航延期ということも致し方のないことであり、だれも文句を言う人もなく了解しましたが、はやる気持ちに水を差されたようなもので、内心ではがっかりして気落ちしてしまいました。しかし、こうなった以上はじたばたしても致し方ないので、我慢するほかはありませんでした。関西や関東方面から集まって来られた六人の方は、一カ月という長い期間なので、一応それぞれの実家に帰って待機することになり、すぐにとんぼ返りで戻られました。関西、関東より遠くの東北方面などから集まった三人は、戻っても慌ただしいので相談の末、そのまま長崎市内に準備された旅館で、ひと月を過ごすことにしました。盛大に見送られて、それぞれ故郷を出発してきたのですから、今更、船の修理待ちで帰ってきましたと言うのも決まりが悪いことですし、それに見も知らぬ土地への好奇心もあって、ここで過ごすことはさほど苦になりませんでした。それぞれの実家から滞在に必要な費用を無心して、三人の共同生活を始めました。

そのころは、そろそろ食糧事情も悪くなり始めて、物資の不足も始まり、日常生活にも耐乏を求められつつありましたので、準備された旅館でも、「一般の人たちでは、とてもではないが受け入れられない。しかし、あなた方には軍から食糧などの支給があるので、お世話することができませう」と、言って親切に面倒を見て下さいました。ときどきは、長崎市内やその近郊の見物にも連れて行ってもらいましたが、特に忘れられない思い出として、ピワ狩りに連れて行ってもらったときのことがあります。あのとときのピワの甘さは、今までに味わったことの無いほどにおいしいものでした。

ひと月が夢のように過ぎて、船の修理もようやく完了して、出航する日が決まりました。実家に戻っていた六人の人たちも、元気な姿で長崎に戻ってきて、久しぶりに九人全員の顔が揃いました。そうになると、気持ちは既に南京に向いてしまいました。

しかし、乗船はしたものの、日本海で跳梁しているアメリカの潜水艦からの魚雷攻撃を避けるため、長崎

から上海に直行することはできずに、朝鮮半島の沿岸伝いに航行することとなりました。潜水艦が待ち伏せをしているという情報が入ると、小さな、それこそ名も知らぬ港に待避し、そこに一週間ぐらゐも停泊することがありましたが、そんなときの食事は、主食がカボチャばかりでした。皆は、「いつ、どうなるか分からないご時勢だから、最後まで皆で頑張りましょうね!」と、言つて励まし合つていました。主人や両親の写真を体に巻き付けて、いつも主人たちと一緒に行動しているという気持ちを持ち続けていました。甲板上で歌を歌つたり、それぞれの故郷の思い出話などをして、泣いたり笑つたりしていましたが、ふだんだったらとても考えられないような素晴らしい友愛の情が、自然と皆の心を結んでくれました。

あちらの港に停泊し、こちらの沖合に避難しながら二週間ぐらゐかかつて、やっと上海の港の岸壁に無事に着きました。上海に駐在している部隊の人が、船まで迎えに来てくれました。主人たちも、二、三日前に上海まで出てきて、私たちの入港を待つていたそうで

すが、いつ入港するのかも分からず、まったくの音信不通でしたので、あきらめて南京に戻つたとのことでした。致し方の無いことと思いましたが、心の内ではがっかりして悲しさが込み上げてきました。上海港での感激の対面を夢見ていたのは私だけではなく、九人が皆その感激を味わいたかったです。途中、何事も無く無事に上海に着いたのですから、これだけでも有り難いと思わなければと心に言い聞かせていました。下船後、上海駅に直行して、南京行きの列車を待ちました。夕方になってやっと、夢にまで見ていた南京駅に到着しましたが、そこには主人たちが出迎えに来ていました。嬉しさと安堵感のあまり、主人を見つめているうちに、自然と涙が頬を伝つて流れていました。

部隊で準備されたトラックに乗つて、初めて見る夕焼け空の映える美しい南京市街を通つて宿舎に向かいました。主人たちも、「合同慰霊祭が、合同歓迎会に変わった」と言つてはしゃいでいました。皆で大笑いを楽しみましたが、主人たちも随分心配していたのでしょ

う、心の中では皆ほっと安心をしたことと思います。

二 南京での生活

私たちの官舎は、日本軍の南京占領以前にアメリカの軍人家族が住んでいたという、広くて大きな鉄筋コンクリート建ての二階屋の洋館でした。一階に二世帯、二階に二世帯というように、一軒に四家族が住むことになり、他の棟も同じように九人の新婚家庭が出来るようになりました。家の周囲は、中国特有の石塀で頑丈に囲ってありました。

夕方になり主人たちが帰宅するときは、ブザーの押し方をだれは一回押し、だれそれは二回押し、と決めておきましたので、ブザーの鳴り方で主人が帰って来たことがすぐに分かり、出迎えに出ました。

炊事は、全部電気コンロを使っていましたし、トイレは当時私たちの生活では考えられないようなことでしたが、水洗式の便所でした。いかにも外国にきたという感じのするハイカラな日常生活でしたが、慣れるまではやはり、便利であるがための苦勞をしました。

今でもそのことがよく思い出されます。

そんなハイカラな生活でも、ただ一つだけ大変だったのは入浴です。風呂は四世帯で共同でしたし、釜は石炭釜でしたので、石炭に燃えつくまでが大変な苦勞でした。近くに山が無いので、薪を集めるのがひと苦勞でした。主人たちが、使用済みの木箱などを持ってきてくれましたので、それを割って薪を作り、大切に使いました。

ある日、私が二階の自室で仕事をしていましたら、何だかさおの様なものが窓越しに伸びてきたので、何かしらと思いつながら窓から下を見たら、中国人がベランダに干してあった洗濯物を取ろうとしていたのでした。「何をするんですか!」と、声を大きく出してとがめましたが、中国人は平気でニタニタと笑いながら去って行きました。同じようなことが何度かありましたが、彼らは他人の物を取っていくなどということはない、何とも思っていないようでした。

主人が休みの日に、あの支那事変の南京城攻略戦での一番の激戦地であった、光華門の戦跡を見学に行ることがありました。いまだに血がにじんでいるよう

な、戦死者の墓標が至る所に建っていて、胸がうずく
思いをしたこともありました。

また、揚子江（長江）の水が、泥のような色をして
流れているのは驚きました。岩手にいるときにもそ
の話は聞いていたのですが、こんなにひどいとは思
いませんでした。立木一本も無い丘の上から見下ろす揚
子江は、流れる水の色とは別に、その雄大なことに
びっくりしました。

日常の生活では、部隊から支給される「配給チケッ
ト」を持って隊内にある酒保に行くと、日常の生活に
必要な品物が、すべて日本内地での値段で買うことが
できました。すべて本物でしたので、皆は喜んで買っ
ていました。また、市内のマーケットでは、酒保では
売っていないような、いろいろな品物が豊富に出回っ
ていましたが、私どもの給料ではとてもではないが手
の出ないような価格でした。

主食、主としてお米やお味噌、お醤油、それにお酒
などは、部隊からの現物支給でしたので、市内のマ
ーケットで購入するものは副食物類だけでしたが、思う

ようには買えず、指をくわえて眺めるだけのこともあ
りました。

だんだんと生活に慣れてくると、以前に住んでいた
人たちが耕作して、そのままにしてあった畑から、サ
サゲ、キュウリ、トマト、ナスなどの野菜が採れるよ
うになりました。肥料もやらす、草取りもあまりしな
いの、良く収穫ができました。鶏は、官舎地域内で
放し飼いをしていましたので、ときどき苦労して卵を
見つけ出して、頂戴していました。さらには、現物支
給されるお米や、メリケン粉などは、夫婦二人の食生
活では余ることがあるので、ときどきいつもお世話に
なっている中国人の家にあげると、大層喜んでくれて
代わりにいろいろな物を作って持って来てくれたりし
ていました。

南京での新婚生活も、昭和十八年ごろまでは、まっ
たく平和な毎日だったのです。ただ中国人の日常生活
には、なかなか理解できないこともありました。その
一例として、黒豚、黒牛、そして鶏はすべて野放しで
した。百姓家の壁には、三十センチメートルぐらいの

徑に丸めて固めた牛糞が、べたべたと張られていたが、何に使うのか聞くと、それをよく乾燥させて燃料にするということでした。南京地区は立木も少ないので、燃料にする薪も無く、干草も大切な燃料になっていました。干草の燃料で炊いた、おかゆや焼きナスなどのほんのりとした味は、今でも思い出します。不衛生な生活環境も、昔の中国では当たり前のことだったので、朝、裏通りに足を踏み入れると、男の人たちが道端の溝に並んで用を足している光景にぶつかることがあります。私たちがその前を通ると、しゃがんでいる中国人が口笛を吹いたり、大声でけしかけたりします。このけしかけはまだ我慢できるとしても、用を足した後に群れてくる金バエにはどうにも閉口したものです。そこを通り抜けるときは、「一、二、三！」と号令を掛けて、口を閉じて息を殺して走り抜けたものでした。

四世帯の共同生活をしばらく続けているうちに、以前将校宿舎だったところが空いたので、そこに引越越しをしました。門の前の小屋には、中国人家族が門番

として住んでいて、いろいろと世話をしてくれました。以前に住んでいた方が単身赴任だったようで、その門番家族の行動を自由にさせていたのか、勝手気ままに官舎に入って来て水洗トイレなどを使うので、随分と困ったものです。宿舎にはバス、洗面所もそれぞれついていました。それ以外に木製の風呂もあって、毎晩沸かしては翌朝に流すようにしていましたが、沸いた時点で自分の小屋から大きなたらいを持って来て、お湯を汲んでいくのです。そのお湯で家族が体を洗っているようでした。私どもの後に入って、お湯を捨てるようにと何度も言いましたが、もう習慣になっていたのでしょうか、馬耳東風でした。でも良い人たちで、野菜などができるとたくさん持ってきてくれました。

ときどきですが、主人は夜になると支那服に着替えて出て行くことがあります。何か探し物をしているのかどうか、私には詳しいことは何も話してもらえませんでしたが、泥棒市場に行っていたようです。泥棒市場は、夜になると止々堂々と店が開かれていて、夜

明けと同時にさあつと店を引き払って、四散してしまふということでした。

こんなこともありました。主人が上海に出張するときに、一緒に行こうと言って連れて行ってもらったことがありました。南京から上海は、ちょうど東京と盛岡ぐらいの距離がありましたので、日帰りは無理でした。上海の繁華街にあった劇場のようなところに入り、隅の方の客席に座りました。支那服を着ていた主人は、「ここを動かないで、私が戻って来るのを待っていてなさい」と、言ってどこかに出て行きました。私は、初めて上海にきて、なんだかよく分からない所に一人で座っていることになってしまい、恐怖心で膝ががくがくし、胸もときどきしてきましたが、主人がいないのにここを動くこともならず、小さくなって座っていました。そのうちに舞台が始まり、赤、青、黄など何色かのライトが回り舞台に向かって照らし出され、客席は薄暗くなりました。すると、薄い透き通るような下着をつけた女性が、迫りあがってきました。その様子を見て、私は腰を抜かさんばかりに驚き

ました。びっくりして、しばらくは目をつぶったままにしていました。今思えば、そこはストリップ劇場だったのです。生まれて初めて私はこんな所に来たのです。主人が早く戻って来てほしいと、そればかりを心の中で念じながらじっとしていました。それでもときどきは、薄目をあけて舞台を眺めました。その女性はストリップしていました。観客は日本人だけでなく、中国人やその他の人たちもいて、舞台に向かって私にはよく分からない言葉や、怒鳴り声を出して騒いでいました。主人が外に出ていた時間は、そんなに長くはなかったのですが、私にとってはとても長く感じられました。主人は無口で昔堅気の性格のうえ、憲兵という職務柄、私に対しても、自分の行動について詳しく話してくれることはありませんでしたので、なぜ私を上海に連れて行ったのか、理由もはっきり分からないままでした。

三 敗戦近くの生活

戦時中といっても、私たち夫婦にとっては平和で穏やかな生活が続いていましたが、昭和十九年の終わり

ごろになると戦局がだんだんと敵しくなり、その影響がじわじわと押し寄せてくるようになりました。毎日、時間を決めているかのようになり、一定の時間になると、重慶の敵飛行場から、爆撃機や戦闘機が五、六機ぐらいずつ編隊で南京上空に来て、郊外にあった日本軍の飛行場を爆撃していきました。この敵機に対して日本軍からの応酬は何もありませんでした。ただ襲われるままの状況でした。爆撃されるのが飛行場だけで、市街地には何の被害もないので、私たちも爆撃の様子を眺めていて、ただ口惜しく地団駄を踏んでいました。

ある日の早朝、主人は非常召集で朝食もとらずに出て行きました。飛行場近くにあった防空壕に直撃弾が落ちて、中にいた人に死傷者が出たとのことでした。帰宅してから、主人は「それは惨めなものだった！」と、一言ぼつりと話してくれました。

また、ある日曜日家にいたところ、ものすごい爆音がしたと思ったら、官舎から約二百メートルぐらい離れたところにあつたクリークの脇に、日本の練習機

が墜落し、搭乗員が三人殉職しました。その際、クリークのそばの中国人の家にも、少し被害を与えたようでした。その近くに住んでいた中国人と結婚していた、静岡県出身の日本人女性が来られて、現場の中国人たちから、「日本人は、応分の修理費を出せ！」などと言われるのがつらいと言って、涙ながらに訴えられました。私も胸のつまる思いで聞いていました。

昭和十九年の中ごろまでは、南京を行き交う日本軍兵士の移動はほとんどトラックでした。「ご苦労さま！ 行ってらっしゃい」とか、「ご無事でね！」とか言って手を振り合っていました。それが年の瀬になるころからは、胸から白布に包んだ骨箱を下げて、ひげは伸び放題、髪はぼうぼう、軍服は汚れたままで、無表情で歩いて移動する隊列を見掛けることが多くなりました。そんな状況からも、この戦争に対する前途に不安な気持ちを抱くようになり、万一の場合における身の処し方を考えたりして、身のひきしまる思いがしていました。「万が一のときには、私たちがどうなるのでしょうか」などと、皆さんと話し合うこと

が多くなってきました。そして、そのときの結論はいつも「私たちにもいつかは大変なことが起きるでしょう。そんなときに命を捨てるのは簡単だけれど、子供たちのためにも、日本内地で私たちの身を心配している父母兄弟・姉妹のためにも、最後の最後まで頑張ることが大切よ！」ということになってしまいました。そして、自分自身にもよく言って聞かせていました。主人たちは、仕事柄いざというときには当てにしていけないと、皆さんで励まし合いながら、毎日を過ごしていました。

昭和二十年の春ごろになると、アメリカ軍が上海に上陸するといううわさがどこからともなく流れてきて、そのうちにだんだんとうわさに真実味が加わってきて、上海居住の中国人は、それを大いに期待していきような行動を取り始めました。私も心配になってきて、主人に「どうなるの？」と聞きましたが、何も答えてくれませんでした。私たち婦人会の人たちも、皆覚悟ができていましたので、何事が起きても大丈夫という気持ちを持っていました。主人は何も言いません

でしたが、全体の情勢は日々刻々と悪くなっているように、家族の引揚げの話もぼちぼち出てきて、そのうちにはそれは現実のこととなってきました。

私も妊娠していたので、皆さんと一緒に実家に帰ることとなりました。主人が、引揚げ家族を引率する責任者として、日本に出張する役目になり、私もほっと安心して準備をしていました。しかし、何事も良いことばかりが通用することはなく、引揚げのため病院に最後の検診を受けに行きましたら、医官から「お腹の中の赤ちゃんは四カ月に入っていて、ここで激しい行動をすると、母子の安全は約束できませんよ」と言われて、引揚げにはドクター・ストップがかけられてしまいました。私は随分と悩みましたが、お腹の中の子供のことを考えると、やはり医官の言うとおりにすべきだと覚悟を決めて、泣く泣く皆さんと別れることになりました。主人は予定どおり引揚者を引率して、日本に行ってしまうので、私は一人ぼっちで心細い一カ月を過ごしました。夕方になると、官舎の下の小路を通るクレーニャンの弾く胡弓こきうの音が、何とも寂しい

音色を出して、私の望郷の念を一層かりたてて、毎日涙を流していました。

約一カ月後に、主人は釜山經由で戻って来ました。が、日ごろ生気あふれていた主人の姿とはまったく裏腹で、身も心も疲れ果ててしまったような有様でした。実家では、梅干しや氷餅など栄養のつく食べ物や、産着、おむつなど土産を控えての必需品などを持たせてくれました。主人の話では、両方の家族は皆無事で、元気に過ごしているとのこと、ひとまずは安心しました。

内地では食糧事情も悪く、日常の生活は大変に苦労をしているようでしたが、それからすれば、今のところ私たちは食糧の心配はありませんでしたので、内地の物資不足の生活についての実感はなかなか分かりませんでした。そのうちに、日本本土のあちこちの都市への空襲の有様を知るようになり、この戦争は負けるのではないかと考えるようになりました。

七月になると、中支那の各地に散らばっていた軍人の家族は、同仁里という所に集結することになりました

た。ほとんどが憲兵隊関係の家族でしたが、現地にご主人を残しての避難生活でしたので、気持ちも随分と動揺していて不安な毎日を送っていました。私たちもお互いに助け合い慰めあって暮らしていました。そこでも、近いうちに日本は無条件降伏をするらしいというわきが飛び交っていましたが、私も心配になりはじめ、主人に問いだしましたが、主人はむっとした表情をしたまま、黙っていました。

四 敗戦、そして移動

昭和二十年八月十五日、まだまだ先の話とばかり思っていたことが、現実のこととなって襲ってきました。いつかはこんな日が来るのではないかと、ただ漠然とした思いでいたのに、それがそのとおりになってしまいました。一応の覚悟はしていたのですが、やはり敗戦のラジオ放送を聞くと、ただ呆然としてしまいました。何も手につかず、夢遊病者のようになっていました。だれが言うともなしに、「いよいよよとなれば、自決しかない。しかし、ただこのままにしても致し方ない。取りあえず身辺整理をして、荷物をまとめなけれ

ば！」ということで、一心気持ちを取り直して家の中の整理を始めました。

避難するときを持って行ける、最小限の必需品に仕上げって整理をしましたが、私は八カ月の身重な体でしたので、いつ出産するかも分かりませんでした。生まれてきた赤ん坊に必要な、産着、おむつ、それに薬品類で手いっぱいとなり、私の物などはほとんど持ってませんでした。

そのうちに、主人が十日ぶりにここに戻って来ましたが、ひげはぼうぼうで顔は青ざめて、疲れきってしまった体、よれよれになっている軍服姿でした。「ほんとうにご苦労さまでした。ゆっくり休んで下さい。」と言う以外には、言葉がありませんでした。

市街に出掛けて日本人と分かると、中国人はすぐに寄ってたかってきて、石を投げたりつばを吐きかけたりにして、いやがらせをしました。つい先日までの現地人の態度からは、想像もつかない変身ぶりでしたが、私は今までずっと親しくしていた少年が、買い物などをしてくれていましたので、大変に助かりました。

ある日、いつ別れ別れになるか分からないというところで、皆で手作りの料理を持ち寄って、「お別れパーティー」をしようと準備をしていたところ、部隊から伝令の人が来て、「直ちに南京駅に集結せよ」という命令を伝えました。「さあ！ いよいよ米るべきものがきた」ということで早速に片付けて、かねがね準備をしていた荷物を、背負ったり手に持ったりして、準備されたトラックに乗り、南京駅に向かいました。南京と上海間を折り返して運行していた日本側の汽車は、これが最後とのことで、それこそすし詰めの状態で、車内は身動きもできないくらいの混みようでした。そんな状態のときに、出産間近で臨月のお腹を抱えていた人の出産がありました。幸いに、助産婦さんや看護婦さんが一緒に乗っていましたので、無事に出産し、毛布にくるんだままで上海まで行き、病院に入れました。私は九カ月に入っていましたので、人混みで押され押されて苦しかったのですが、お腹を押さえ続けたままで上海に着きました。幸いなことに、車内で出産することは無かったので、安堵しました。

五 収容所での生活

すし詰め列車は、やっと上海に着きましたが、駅からすぐに上海郊外の収容所に送られました。結局は、その収容所で四カ月余りを過ごすこととなったのです。収容所は「維新宿舍」といって、以前は兵舎だった建物で、同じ様な規模の建物が五棟ぐらい並んでいました。一棟には、おおむね五、六十人の引揚者が収容されていたように記憶しております。建物の外に流し場が並び、物干し場もありました。

ただ、一番困ったことは便所で、溝のような形の素掘りの所に、板を渡してむしろで仕切りをしたままのものでした。男の人はまだよいのですが、女の人は、最初のうちはとても用を足すことができませんでした。そのうちに恥も外聞もなくなり、どうしても生理的現象でしたので、しゃがんでしまいました。

炊事は当番制で、男の人が作り、バケツにご飯や味噌汁や皮つぎのままのゆでたジャガイモ、それにぎくぎくと切ったハクサイとか豆などを入れて、配られました。私は、食べる気にならずにいましたら、面会に

来た主人に叱られました。「食べる物も無く死んでいった南方の鳥々の兵士、そして餓死寸前の状態で、強制労働させられている捕虜収容所の人たちのことを考えれば、食べ物があるだけでも文句は言えない。お腹の子供のためにも、無理してでも食べなければ駄目だ」と、諭されました。

一週間ぐらいたってから、同じ地域の中の他の建物に移りました。今度のところは、棟が三つぐらい横に並んでいて、それぞれが六畳ぐらいの部屋に仕切られていました。六畳二間に、大人六人、子供二人が入れました。主人たちは、直ちに戦犯容疑者としての別の収容所に隔離されました。ここで主人と別れることは、私にとっては断腸の思いでした。しかし、主人たちは、偽の通行腕章を作って、ときどき交代で私たちの収容所に面会に来てくれました。そんなときには、何やかやと食べ物差し入れをしてもらいました。主人が来ると、同じ部屋の子供たちは私たちのそばを離れないのです。何か食べ物を持って来ているということを知っていたからです。私も、必ず皆と分けて食べ

ることにしていました。人間というのは、本当に食べることが大事なのだと、しみじみ感じたものでした。入浴は一週間に一回、それも三十分と決められていて、大勢の人が同じ時間に入るので、それこそ「イモを洗うがごとく」というすさまじさでした。そのころ、錢型田虫が伝染して、ひどい思いをしたこともありました。皆は薬が無いので、随分と苦勞をした様ですが、主人が知り合いの軍医さんから薬を分けてもらってききましたので、私は大変に助かりました。それから入浴を止めて、水で体を拭くこととしました。こんな生活がいつまで続くのかと心配をしていましたが、そのうちに帰れるということで、皆さんと話合い励まし合って、その日の来るまで頑張ることを誓い合って過ごしていました。

私たちは、出身地方別にまとめられていましたので、苦しい毎日ながらお互いに共通の話題もあって、気の紛れることもあり、他のグループよりも団結が強固だったので、こうして生き延びることができたのだと、今でも感謝しております。

収容所での生活が続くと病人も出てきましたが、適切な治療もできず、また、栄養もだんだん悪くなってくるので、死者も出てきました。空き地で火葬することも多くなりました。私の友達も、八カ月で死産をし、それがもとでご本人も亡くなってしまいました。ご主人はまだ南京に残っておられたので、ご主人が来るまでの間ということで、畑の隅に、仮埋葬しました。しばらくしてご主人が上海に来られたので、主人たちが掘り起こして対面されましたが、あまりのショックでご主人は自殺されるのではないかと、四、五日主人たちが交代で付き添っていたそうです。その方は、奥さんと赤ちゃんを火葬にして、引揚げ第一便で故郷に向かわれたことを後に聞き、ほっとしたものでした。

私は、十月にお産をしました。産室になっている六畳間には、既に出産を終えられた方が二人おられましたので、なるべく声を出さないように頑張り、朝方に男の子を無事に出産することができました。助産婦さんや周りの方々にも、随分とお世話になりました。そ

の産室で一週間ほど面倒をみていただいたことは、今になっても忘れ得ないことです。

戦犯容疑で別の収容所に入れられた主人たちも、特に何をするということもなく暇だったので、英語を習ったり、物を作ったりして過ごしていたそうですが、そのうちに中国人と対面して戦犯を決めるといううわさが流れてきて、皆とても心配しました。故意に判断されてしまったら、取り返しをつかないことになるので、気が気ではありませんでした。幸いに難を逃れることができました。

六 引揚げ、懐かしの故郷へ

十一月ごろになると、引揚げ開始により申し込みが始まりました。皆さんで相談しましたが、ご主人の消息が分からない人、奥地から家族別れ別れになって、歩いてここまでたどり着いた人など、いろいろな事情により、皆の意見もまとまらずに、別々に申し込むこととなりました。私は、主人から最後まで申し込みを待つようにと言われていましたので、早く帰りたい気持ちを押さえて、申し込みを我慢していました。ぎり

ぎりまで待つて最終便から二番目の便に申し込みましたが、本当にこの便に乗せてもらえるかどうか、不安な気持ちでした。

引揚げ開始から十二回目ぐらいの便だったと思いますが、友人たちが喜び勇んで乗り込んだ船が、揚子江の河口で機雷に接触して沈没し、乗っていた人たちは裸同然の姿で再び収容所に舞い戻ってきました。当然、持っていた荷物は全部海の藻くずとなってしまいましたので、私たちは、それぞれのけななしの荷物の中から着る物をあげました。皆さんは大変に感謝して、次の日の船に乗って行かれました。

いよいよ私も引き揚げる順番がきました。主人は、一緒に収容されていた隊長から、「おれが全部責任を負うから、お前たちは家族と共に引き揚げろ！」と言われて、中国人の夫人に姿をやつして、引揚船に乗ってきました。私はやっと安心し、気持ちも軽くなりました。南京時代のショーハイ（少年）が、最後までよく面倒をみてくれて、食糧も持たせてくれました。親子が一緒にすし詰めの船室に押し込められましたが、

これで日本に帰れると思うと、多少の苦しみもつらくありませんでした。上海を出航した夜には、亡くなった子供さんの水葬がありました。ドラの音と共に「ズドン！」という音を残して、遺体が海に投げ込まれましたが、私どもは人ごととも思えず涙を流したものです。

引揚船は大型の貨物船でしたが、外海に出ると大変に揺れ出しました。皆で、バケツの取り合ひでした。横になっていても、転がされているような気分になっていました。主人は赤ん坊を連れて甲板に行き、座っていました。

日本の陸地が見えたときの気持ちは、何とも言えません。今までの苦しさが一度に吹っ飛んでしまったような感激でした。上陸するまでにはいろいろな手続きなどがあって、数時間以上もかかりました。背中に背負っている赤ん坊が、どうなっているのかを見ることもできませんでした。

上陸第一夜は、高島屋デパートの建物でしたが、窓にはガラスが入っていませんでした。コンクリートの

床に敷いた藁むしろの上に、親子三人が寄り添うようにして横になりましたが、まんじりともしませんでした。しかし故郷に帰れるという喜びで、苦になりませんでした。食糧は乾パンや玄米のお握りなどを渡されたように思います。

帰郷する各県別に別れて列車を待ちましたが、列車が到着すると皆は夢中になり、我先にと乗り込みました。広島に着いたときには、車内の人たちが一斉に嘆息をあげました。見渡す限り一面の焼け野原、赤茶けたトタン板、原子爆弾の恐ろしさを、まざまざと目のあたりにしました。私たちだけでなく日本人は、皆それぞれで苦しい思いをしたのです。

東北本線になってからは幾らか楽になりましたが、赤ん坊は二人の膝の上を行ったり来たりしていて、さぞ疲れたことでしょう。昼頃、やっと懐かしい故郷、関駅に着きましたが、雪が積もっていました。駅前の広場に大きな穴がありました。爆撃の跡だったそうです。家に着いて、玄関で「ただいま」と言ったら、父が出てきてびっくりしていました。母は、すぐ

に赤ん坊をしっかり抱き上げて、「よくぞ無事で帰ってきた」と泣いていました。どこそこに引揚者が帰ってきたと聞くと、すぐにそこを訪ねて、私たちの消息をつかもうとしていたそうです。

四、五日たったころに、アメリカ軍のMPがジープに乗って我が家に来ました。「許可なく引き揚げてきたので調べる。調べが終わり次第帰す」と通訳が言っていて、主人を連れて行きました。私は、目の前が真っ暗になりました。それからは毎日、これから先どうしていけばよいかということばかり考えていました。幸いに、五日ぐらいで帰されました。その後知ったことは、主人たちをかばってくれた隊長が、巢鴨の戦犯収容所に移されたということで、主人が面会に行きました。後の風の便りに、処刑されたとか、病死したとかということを知りました。お気の毒なことです。

七 生活再建

主人は憲兵出身でしたので、公職追放となり、公的な仕事には就くことができず、また商売をする気もなかったのです、経済的にも随分と苦勞しました。引揚げ

時に支給されたお金も貯金封鎖になって、毎月おろせるだけで生活をしなければならなくなりました。幸いに主人の実家が農家だったので、少しは助けってもらいましたが、それでも大変でした。同郷で、やはり憲兵出身の友人から、闇商売を一緒にしないかと誘われましたが、その話には決して乗らずに、ただ黙々として実家へ手伝いに行っていました。

私は、勧める人があって商いを始めましたが、物の無い時代でしたので、とんとん拍子に売れて商売がおもしろくなり、少しずつ店を広げました。主人はそれでも飽きたらずに、昭和三十年ごろ友達十人ほどで資金を出し合って、小さなデパートを開きました。当時では珍しかったので、業績もあがっていきました。しかし、昭和四十二年に大火に遭ってからは思わしくなく、その後倒産してしまいました。他の人たちは、自己資金を守ることに懸命でしたが、主人はできませんでした。後に皆さんから「討ちてし止まん」の気概で、最後まで立派だったと同情されましたが、過勞のため六十五歳で亡くなりました。

そんな境遇の中でも、幸いに子供たちは順調に育つて、立派に暮らしています。私の二人の兄も戦死しました。子供が生まれることも知らずに、レイテ湾で死んだ兄の子供も、もう五十七歳。まだまだ戦争は終わっていない様な気がします。子供を亡くし、夫を亡くし、父を亡くした人々のことを思うと、何ともいえない気持ちになります。

でも、だれが、何が悪かったのか定かではないが、そんな中で一心同体で生き抜いた青春時代を、今になれば懐かしく思うこともあります。良い一生を終えるためにも、二度と再び、戦争のような悲惨な殺し合いは真つ平です。

今年も五十六回目の終戦記念日を迎えようとしています。様々なことが思い出されて感無量です。

北京からの引揚げ体験記

東京都 川合 継美

トルストイの畢生ひせいの大作である「戦争と平和」という小説は、いつも私の頭の中に刻みこまれていて、消えることがありません。それは、戦争を体験した者であるなら誰しもが、この相反する二つの言葉の中で生きてきたからであると思います。あの太平洋戦争がもたらした、さまざま悲惨な悲劇。年月を経るごとに、ともすれば遠く忘却のあなたに流されてしまいそうな昨今ですが、今のこの平和は、こうした戦争の尊い犠牲の生命の上に築かれたものであることを、私たちは一瞬たりとも忘れてはならないことと思います。

私は、そう自分に言いかけながらも、ここに自分の引揚げの体験を書くことに、非常にしゅん巡しました。その理由は、引揚者としての私は、比較的恵まれた状況下であり、満州奥地からの方たちのように、